



まもなく卒業する36期生へ

3/13に義務教育を修了する3年生に、次の文章を贈ります。(原文の一部省略、漢字や句読点、改行箇所等を中学生向けに修正)

「21世紀に生きる君たちへ」 司馬 遼太郎(歴史小説家, 故人) 1987年発表

私は、歴史小説を書いてきた。もともと歴史が好きなのである。両親を愛するようにして、歴史を愛している。歴史とは何でしょう、と聞かれる時、「それは、大きな世界です。かつて存在した何億という人生がそこにつめこまれている世界なのです」と、答えることにしている。私には、幸い、この世にたくさんの素晴らしい友人がいる。歴史の中にもいる。そこには、この世では求めがたいほどに素晴らしい人たちがいて、私の日常を、励ましたり、なぐさめたりしてくれているのである。だから、私は少なくとも2千年以上の時間の中を、生きているようなものだと思っている。この楽しさは --- もし君たちさえそう望むなら --- おすそ分けしてあげたいほどである。

ただ寂しく思うことがある。私が持っていない、君たちだけが持っている大きなものがある。未来というものである。私の人生はすでに持ち時間が少ない。例えば二十一世紀というものを見ることができないに違いない。君たちは違う。二十一世紀をたっぶり見るができるばかりか、その輝かしい担い手でもある。もし「未来」という街角で、私が君たちを呼び止めることができたならどんなにいいだろう。「田中くん、ちょっと伺いますが、あなたが今歩いている二十一世紀とはどんな世の中でしょう」そのように質問して君たちに教えてもらいたいのだが、ただ残念にもその「未来」という街角には、私はもういない。だから君たちと話ができるのは、今のうちだということである。

私は、人という文字を見るとき、しばしば感動する。斜めの画が互いに支え合って、構成されているのである。そのことでも分かるように、人間は、社会を作って生きている。社会とは、支え合う仕組みということである。原始時代の社会は小さかった。家族を中心とした社会だった。それが次第に大きな社会になり、今は、国家と世界という社会を作り、互いに助け合いながら生きているのである。自然物としての人間は、決して孤立して生きられるようには作られていない。このため、助け合う、ということが、人間にとって、大きな道徳になっている。助け合うという気持ちや行動のもとには、いたわりという感情である。他人の痛みを感じることも言ってもいい。優しさと言いかえてもいい。「優しさ」「思いやり」「いたわり」「他人の痛みを感じること」みな似たような言葉である。これらの言葉は、元々一つの根から出ている。根といっても、本能ではない。

だから、私たちは訓練をしてそれを身につけねばならない。その訓練とは、簡単なことだ。例えば、友達が転ぶ。「ああ痛かったろうな」と感じる気持ちを、そのつど自分で作りあげていきさえすればよい。この根この感情が、自己の中でしっかり根づいていけば、他民族へのいたわりという気持ちもわき出てくる。君たちさえ、そういう自己を作っていけば、二十一世紀は人類が仲良く暮らせる時代になるに違いない。

鎌倉時代の武士たちは、「頼もしさ」ということを、大切にしてきた。人間は、いつの時代でも頼もしい人格を持たねばならない。男女とも、頼もしくない人格に魅力を感じないのである。もう一度繰り返そう。先に私は「自己を確立せよ」と言った。「自分には厳しく、相手には優しく」とも言った。「それらを訓練せよ」とも言った。それらを訓練することで、自己が確立されていく。そして、「頼もしい君たち」になっていく。以上のことは、いつの時代になっても、人間が生きていくうえで、欠かすことができない心構えというものである。

君たち。君たちはつねに晴れ上がった空のように、高々とした心を持たねばならない。同時に、ずっしりとたくましい足どりで、大地を踏みしめつつ歩かねばならない。私は、君たちの心の中の最も美しいものを見続けながら、以上のことを書いた。書き終わって、君たちの未来が、真夏の太陽のように輝いているように感じた。

(平成元年「小学校国語六年下」大阪書籍より)

